

## 十二 浦の今

浦島太郎が玉手箱を開いて現在に戻ったとき、浦に見知った人はおらず、人々も彼のことを知らなかった。彼は、数世代にわたって不在にしたそこでの出来事を知らなかった。一方、わたしは五十年近く定住しなかったが、毎年数回帰って来ていたので、生まれた頃からの浦のおおよその変遷を語るができる。もちろんそれは、集落の同世代がみな知っていることだ。広がりのある話にするには、第二次世界大戦後からのこの国のありさまに触れないわけにいかない。すると、国中の同世代が頭の中に蓄えている話になってしまう。無駄な愚痴話ということになるだろう。それでも語るのは痴愚ということになるが、この変化はたしかにただ事ではないから、孫たちのために状況を書き残しておこうと思う。

去年の秋、地元の漁業協同組合の市場で「魚祭り」が催されたのに行つて、ある印象が頭をかすめたがそのままになっていた。最近のマスメディアの報じる景気の良いニュースは、「ビジネス」に疎い者のそんな印象を押し流してしまうほどだ。けれど

も、ここで暮らして人と話をしていれば、漁業をめぐる状況が解決のむずかしい構造的な問題であることを教えられる。

魚祭りは、落成してまもない大きな魚市場で開かれた。広くちらしが配られたが、用意された椅子が足りないほどには人が来ていない。大多数が近くの人たちと見える。十分な盛り上がりのないその場のようすは、日本の漁業をとりまく問題の縮図を示している。知人が、今の水揚げはこれほどの広さを必要としないが、この大ききならざるをえなかった、と解説してくれる。ここは、下関を別格として山口県の日本海側で大きな魚市場なので、大漁でも競りができるほどに広く造られた。ところが実際には、近年漁獲量は大幅に減って新施設は大きすぎる。漁業関係者はみんな知っているのに、その名にふさわしい規模の施設が建設されたのである。本当は漁業者にはもつと直接的な振興策と資金が必要なのに、公共事業費は建設業者に行ったのである。

ここの漁協は、奥まった湾を仕切って鰯や鯛を養殖する特徴あるやり方で以前は好調だったが、規模の拡大競争に敗れて閉鎖になった。組合員も困難に直面している。乗組員の多い底引き漁船は、漁獲量が減った上に魚の値段も下がって、一組、一組と数を減らしている。最近燃料の値上がりで、乗組員に十分な給料を出すこともままならない。そして、船乗りになる青年を見つけることが困難になった。大きい船はさ

らに減少しつつある。このあたりで今漁業に従事している人たちはほとんどが老年といえるだろう。年金と家族のパートタイム収入で家計を維持している組合員が多いと思われる。漁港には独りで漁をする小型船がまだたくさんあるが、その稼働率はどのくらいあるのだろうか。この経済状況では、漁業を継ぐ者がいないのは当然である。立派な魚市場の建設が経済指標に貢献して、ひと時はやし立てることができても、地域社会がかかえている深刻な問題を解決しない。

個々の組合員が展望を開けないまま苦勞しているとき、その組織である漁業協同組合も安泰ではない。とくに山口県の漁業協同組合の連合体は、日本のバブルの頃に投資した資金を穴埋めできない事態に陥ったことをきっかけに、県下一円の組合が合体して一つの組合になっている。それでも合併した組合の運営は順調な状態から遠い。組合員は出資を増額することを求められた。事業体が多くはないこの地方では、かつては漁協職員といえれば安定な就職先だったが、近年そこを希望する若い人はいない。そのことが、漁業協同組合の実情を証言している。それでは、農業協同組合はどうだろうか。農協は漁協のようなトラブルをかかえていないのでまじなように見える。しかし実態を知っている人が、農協は、本来の農業関連事業ではなく、預金や共済保険などの金融事業で息をついているのだと指摘する。

産業の中核に農業や漁業があつたこの市で、産業構造はあと戻りできないほど変化してきた。たしかに以前も、純粋な農業や漁業の収益の割合は大きくなかつただろう。農業・漁業に従事する家庭はほかの仕事の収入にかなり依存していた。しかし、一次産業が二次・三次産業につながる経済連関がまだうまく働いて、地域経済が成り立っていたのである。だから、家の仕事は次の世代に引き継がれることが多く、社会が大きく変質しないで維持されてきた。それが、一九六〇年代から変化を始めたのである。この市で統計をとれば、若い世代が農業や漁業を引き継いだ家は数えるほどしかないだろう。従事者が歳をとつても生産が維持されてきたのは、機械化などの技術が下支えをしてきたからだ。その技術進歩が、水産資源を減らして漁獲量を減少させた大きな原因でもある。また、都市とは言えないこの地方でも、農業従事者の減少は目をおおうほど。耕作放棄地は、山あいだけでなく、平地の広がるところでも目につく。わが家の親類縁者を見渡しても、まだ自家用米をつくっているのは二、三軒。

商業でも、スーパー・マーケットの進出に象徴される事態が進行して、店を引き継ぐ人が激減した。この市で一番にぎやかだった通りは、多くの店が閉じ住人も減つて、以前のたたまいだけが残っている。こうして、農業でも漁業でも小売業でも、次の世代は雇用される職に就くようになった。しかも、大部分は市を出て行った。その若

い世代の生活様式は変化して、いなか生まれでも魚をさばいて料理するような家庭は少ない。魚は期待するほど売れず魚価はむしろ下がっている。親が子の世帯に米を送るといふこともほとんどできなくなった。今年になって、県で二番目の温泉地の江戸時代から続いた老舗ホテルや、浦の名を全国に知らしめたかまぼこの製造工場の一つが倒産したというニュースも加わった……。こうして、現在の状況がある。地域共同体は変質することによってしか存続できないだろう。ここに暮らす蝶は浮かれることができない。

日本中の同世代が知っているこの推移をこれ以上語ってもはじまらない。眼を転じてほかの国を見てみよう。インターネットを覗く蝶は、ふとした機会に、ヨーロッパのローカル鉄道の状況を知った。フランス国鉄の高速列車GTVが停まる駅から分岐するローカル線で、閉鎖された駅があるらしい。時刻表を見ても、数えるほどの便しか運行されていない。こと同じような状況だ。モータリゼーションの進展という原因があるにしても、ヨーロッパの中で農業部門の強いフランスでも、地方共同体の生活が質的に変化していることを推察させる。もう一つ、小さなニュースでスペインの状況を知った。スペインは西ヨーロッパの周辺国で、経済的にフランスよりも苦境に

ある。その北西部のいなかの村が外国人に買われているという。ヨーロッパの中心諸国の裕福な人が、まとまった農地の付属する家を別荘として買うのである。農村の疲弊がそこでも進んでいる。もともと日本では、好ましい農園に囲まれた頑丈な住宅は少なく、別荘として買うほどゆとりのある人も少ないし、外国人に対して共同体の障壁は高いから、そういうことは起きないで空き家が増えるだろう。日本に畜産物の輸入を強いるアメリカ合州国でさえ、畜産農家が苦勞しているのだから、探せばもっと多くの似た事例があるはずだ。蝶の見聞は限られているけれども、世界資本主義システムに共通する状況を教えている。

もうありふれた言葉である経済のグローバル化が世界中で進展していて、日本も例外ではないのである。蝶が見ている浦の今の状況は、世界的な規模で起きている。心配なのは、他国に先駆けて急激に人口減少の進む日本では、この社会変化が過酷だろうということだ。

経済構造と社会構造のこれほどの変化に対して、政権担当者が実施していることは、竜宮城の話のように聞こえる。景気のいい話を宣伝する政治家が自分の言葉を本当に信じていると見なすと、その知力を疑いバカにすることになりかねないから、まとも

に受け取ってはいけないのだろう。現在の日本にとって最も重大な環太平洋経済連携協定(TTP)の交渉は、日本の経済・社会構造の変化を追認し、先を行く合州国流に従うかどうかという問題だが、新聞は日米間で関税交渉が難航していると報じている。交渉事だから譲歩を余儀なくされて、現政権が先の選挙で勝つときにした公約は破られることになるだろう。じつは、黒子として政策を実施する官庁の「秀才」たちは、もう現在の構造を変えることはできないとあきらめて、大勢に順応すべく、世論誘導に苦心しているのではないだろうか。

現実に実施される経済政策を見ればそれが分かる。企業減税をして国際競争力を高める、東日本大震災の復興税は企業に対してとりやめる、雇用形態など企業の自由な経済活動に足手まといな規制はさらにとり除く……などなどだ。政権に参加している人々の真意は、日本経済の中核にある企業の業績を上げて、経済指標を高め、政権を維持することにあるのだろう。資源輸入代金の増大で貿易収支が赤字になる中で、輸出産業や金融業が過去最大の収益をあげ、投機マネーはまだ株式市場にある。そこで、国民へ少し分配するという姿勢を見せるために、給料を上げるように呼びかけている。しかし、それをためらう多くの企業があるし、現実に電機会社のリストラクチャリングは今も進行中である。公金をつぎ込んでの現在の若干の好調をいつまでも続けられ

ないことは、多くの経済人が公言している。好調らしさを維持するためには国の借金を増やし続けるしかないだろう。危機を深めながらの公金の出費が国民全体にまで戻ってくる時間的な余裕があるだろうか。

この状況がうすうす分かつている人々にフラストレーションがたまっている。それが、今起こりつつある冷静さを欠いた政治的な動向の根本原因だろう。老夫は、そういう人々が短気な行動に走らず、どうか一呼吸おいて大人の良識をとり戻してほしい、と願う。

住んでいる浦の出来事を見ていたら、また、この雑記帳に記してきた話題に戻ってしまった。いなかの生活もそれほど、世界資本主義経済のシステムに組みこまれていく。出来上がってしまった経済と社会の構造を改善することは容易でないと肚をすえて、今までとは違う本場に新しい暮らし方を生み出さなければならぬのだ、と思う。実効あることをできない園丁は、せめてリングの木を育てる生活を続けよう。老夫の明日は知れないとしても、木が枯れたら明日もリングの木を植えるだろう。